www.xtrapapers.com

Diploma Programme
Programme du diplôme
Programa del Diploma

Japanese A: literature – Higher level – Paper 1
Japonais A : littérature – Niveau supérieur – Épreuve 1
Japonés A: literatura – Nivel superior – Prueba 1

Monday 9 November 2015 (afternoon)
Lundi 9 novembre 2015 (après-midi)
Lunes 9 de noviembre de 2015 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

Instructions to candidates

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is **[20 marks]**.

Instructions destinées aux candidats

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est de **[20 points]**.

Instrucciones para los alumnos

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es **[20 puntos]**.

8815–0113
© International Baccalaureate Organization 2015

International Baccalaureate
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

www.xtrapapers.com

次の文章と詩のうちどちらか**一つ**を選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

1.

ベンチの前を通りすぎた人の手に、コーヒーカップが握られていて、慌てて目で追ってみたのだが、持ち主は中年の白人男性だった。公園のベンチで長い時間ぼんやりしていると、風景というものが実は意識的にしか見えないものだということに気づく。波紋の広がる池、苔生した石垣、樹木、花、飛行機雲、それらすべてが視界に入っている状態というのは、実は何も見えておらず、何か一つ、たとえば池に浮かぶ水鳥を見たと意識してはじめて、ほかの一切から切り離された水鳥が、水鳥として現れるのだ。では何も見ていないとき、あるいはすべてが視界に入っているとき、実際には何が見えているかというと、たとえばさっき通りすぎたコーヒーカップの残像から、ぼくの目には、学生のころ一人旅をしたニューヨークで、生まれてはじめて入ったコーヒーショップの店内が広がっており、鼻先にはコーヒー豆を煎（い）る香ばしい匂いとシナモンの香りが漂っている。注文カウンターにはヘビー級のボクサーのような屈強な黒人青年が立っていた。睨（にら）むようにこちらの目を見つめて、早口に次々と何かを尋ねてくるのだが、その単語の一つとして聞き取れない。苛々（いらいら）とカウンターを叩く黒人青年の太い指には、シルバーリングがいくつもつけられている。仕方なくすべての質問にＹＥＳと答えると、かれはうんざりした顔で注文を奥に通した。しばらくしてカウンターに出されたカップを受け取り、店内を逃れてテラス席へ出た。椅子に腰かけ、ふっと息をつけば、ニューヨークの市街を歩き回った疲れが急に出る。からだを屈（かが）めて、ふくら脛（はぎ）を指で揉（も）んだ。心地よい痛みで脚全体がジーンと痺（しび）れる。目の前の並木道を枯葉が埋めつくしており、遠くから漆黒のドーベルマン[1]に手を引かれた白髪の老婦人が近づいてくる。その姿がとてもシックで、つい見惚（ほ）れてしまった。ふと、近づいてくる老婦人が実は男性かもしれないと思ったのは、ワシントンスクウェア公園広場から聞こえるテナーサックス[2]がスティング[3]の「Englishman in New York」を奏（かな）でているせいで、そのミュージックビデオに登場していた老嬢が、実は男性で、クエンティン・クリスプというイギリスの作家であることを教えてくれたのが、高校時代の同級生ひかるだったことを思い出す。（略）十六歳の春、バスケット部だったぼくは、体育館で体操部のひかるに一目惚れした。その夏、勇気を振り絞って告白したのだが、どうしても恋愛対象として見ることができな

www.xtrapapers.com

いと言われた。「弟にそっくりだから」という理由で、ぼくの告白は反古にされたのだ。（略）コーヒーショップのテラス席でなにげなく二の腕を揉みながら、並木道を遠ざかるドーベルマン[1]と老婦人の姿に目を奪われていたせいか、背後の店内で騒ぎが起こっている[2]ことに気づかなかった。振り返り、耳に神経を集中させて店員の黒人青年とフレームのない眼鏡をかけた女性客との会話を聞いてみると、どうやらぼくが間違えて、彼女のノンファットだかローファットだかのミルク入りコーヒーを先に持ってきてしまったらしいのだ。こちらとしては次々と浴びせられた質問にすべてYESと答えたまでで、代金を払ってカウンターにカップが出てくれば、それが自分の注文した品だと思う。女性客は店内にいるすべての客のカップを調べ上げそうな勢いだった。カップを持ち、慌ててそのテラス席から逃げ出すように、視界の遠近をゆるめると、心字池[4]の石塔が、グンと目の前に迫ってくる。ベンチの前を若いサラリーマンが通りすぎ、ちらっとこちらを一瞥する。通りがかる人には、たとえばぼくがこのベンチでニューヨークのコーヒーショップの店内や、もう何年も前のひかる（略）を思い描いているとき、ぼくが何を眺めているように見えるのだろうか。視線の先にある池や石塔を眺めているように、ちゃんと見えているのだろうか。こうやってぼんやりした状態からふと我に返るとき、ときどき戦慄のようなものが走る。いま自分が見ていたもの、記憶のような、空想のような、どこかあいまいで、いわばプライベートな場所を、通りすがりの人に盗み見られたような気がするのだ。

吉田修一『パーク・ライフ』二〇〇二年

1 『ドーベルマン』…ドイツ原産の犬種。

2 『テナーサックス』…楽器サクソフォーンの一種。

3 『スティング』…イギリス人のミュージシャン。

4 『心字池』…「心」の字の形をした池。ここでは東京千代田区日比谷公園内にある心字池を指す。

www.xtrapapers.com

2.

石を蹴(け)る

不用意に小石を蹴ってはいけない
あなたの足が小石を蹴るとき
つま先にはじける電気の具合で
あなたは石に試される

長い一本道をゆく所在のなさに
ふと目についた小石を
ひょんと蹴った経験は
たぶん誰(だれ)にでもあるだろう
二、三度蹴って
それきりよしてしまう場合が多いが
どういうわけか
放(ほう)っておけずに
川へ落ちたら拾いにいき
道をそれたら取りにいき
くりかえし
くりかえし蹴って
蹴り続け
とうとう家まで連れてきた
そういう人もいるだろう
そしてなかには
どうにも別れられなくて
家のなかに招きいれ
以後
生活をともにする

www.xtrapapers.com

25　そんなケースもあるのです
　　石は比較的大食であるが
　　いくら食べても
　　大きくなったり歩いたりしない
　　ものを言ったり笑ったりもしない
30　石を子どもにしたい人には
　　その点
　　物足りないかもしれないが
　　友人には最適
　　あなたより先に眠りにつかず
35　ささいな話に耳をかたむけ
　　ときどき歌を聞かせてくれる
　　何よりもそのやさしさは
　　あなたが死んだあとに発揮される
　　親も姉妹もいないあなただから
40　死体の発見は遅れるけれど
　　石は
　　決して見捨てることはない
　　あなたのからだが溶け
　　液体になり
45　それから乾いた粒子になって
　　畳のうえをチリのように舞いはじめるまで
　　石は
　　黙ってそばにいる
　　安物の涙をながすこともなく

平田俊子『夜ごとふとる女』一九九一年